



筑紫女学園大学リポジット

A Study on the Classification and Use of Wall Postings in Elementary School Classrooms: Survey of Classroom Postings and Analysis of Semi-structured Interviews with Elementary School Teachers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石原, 努, ISHIHARA, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1103

小学校の教室掲示の分類整理及び その活用法に関する研究

— 教室掲示調査と小学校教員を対象とした半構造化面接を通して —

石 原 努

A Study on the Classification and Use of Wall Postings in Elementary School Classrooms: Survey of Classroom Postings and Analysis of Semi-structured Interviews with Elementary School Teachers

Tsutomu ISHIHARA

1 研究の背景と目的

いじめ問題や不登校の人数増加等は、現在の日本社会における問題の一つとなっている。「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省 2020)によると、いじめの認知件数は前年度より約6万件増え小学校全体として60万件以上、不登校の人数は小学生5万人以上で、共に過去最高の数値となっている。これらの問題は、その背景や要因が様々であり、それらが複雑に絡み合っているため、容易に解決することができない問題となっている。

学校現場では、このような問題の解決に向けた取組を推進していかなければならない。その取組の視点の一つとして、学級において、適切な学級経営を行っていくということが挙げられる。この視点について、鳥海・石井(2007)は、「いじめや学級崩壊などは、教師の適切な学級運営によって防ぐことができるケースが多い。」¹⁾と述べている。また、文部科学省(2014)は、教員の資質能力の総合的な向上方策の一つとして、「学級経営を的確に実践できる力」²⁾を挙げている。このように、いじめや不登校に関連した問題を解決していくことと、教師の学級経営を適切・的確に実践する力(以下は、この力を「学級経営力」とする。)を高めていくことは関連があるといえる。

学級経営力には、様々な要因や要素が関連している。本研究の基礎研究の一つである「学級経営案(小学校版)の内容分析及び考察」(2018)では、学級経営の全体構造として「教育理念」「集団形成」「子ども理解」「教室環境」の4要因が抽出された。これらの4要因について要約すると、教師は、それぞれの教育理念の下、子どもへの理解を深めたり、学級の集団づくりをしたりしながら、適切・的確に学級経営を推進していこうと考えている。また、それらをサポートする取組として、教室環境を整える取組があり、その一つに、掲示物を作成し活用していることが明らかになった。教室掲示を活用しながら、学級の約束事等に関する子どもの共通理解を図ったり、それらの約束事等を学級に定着させたりして、安定した学級の組織づくりを行っているのである。前回の研究にお

いては、その掲示物の具体的な活用法や役割等については、明らかにすることができていない。

そこで、今回の研究では、小学校において、よりよく学級経営を推進していくための教室掲示の活用法やその役割等を明らかにしていくことを目的として進めることとした。具体的には、まず、教室掲示を調査し、その内容を分析する。次に、調査分析で明らかになったことをもとに、具体的な活用法や役割等について整理していくこととした。

2 本論における学級経営の定義

学級経営の定義は、研究により様々であるが、大きく分けると図1のようになる。Aは、主に授業づくり・授業時のルール等を中心とした授業経営と、主に信頼関係づくり・集団づくり・生活面に関すること等を中心とした学級経営に二分するが、それぞれ重なりがあるという考えである。この重なりについてであるが、生活場面に関する学級経営が授業経営の中にも活かされる場面が多々存在するというように、それぞれの取組が関連している。Bは、授業場面と生活場面に区分けし、それらを総括的にみて学級経営とするという考えである。Aとの大きな違いとしては、授業場面における経営も、全て学級経営と位置付けていることである。

授業場面における経営も、学級づくりをよりよく展開していくために欠かすことのできない視点ではあるが、本研究では、主に授業場面に関する教師の経営方針は除外することとし、図1-Aを学級経営とし研究を進めていく。

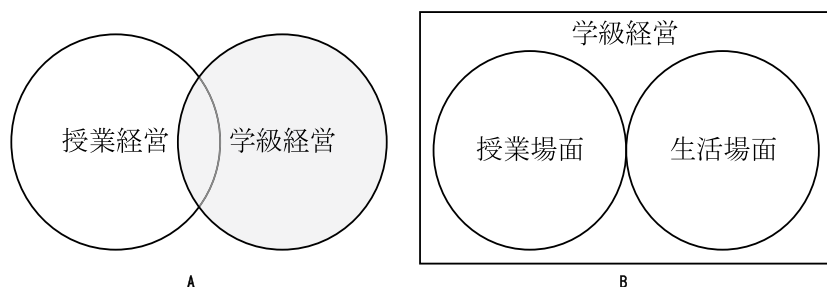


図1 学級経営の位置付け

3 研究1「教室掲示の調査研究」

(1) 調査の目的

小学校の教室掲示を調査し、その結果をもとに教室掲示の内容を分類整理することを目的とする。

(2) 方法

① 調査時期

2020年4月～2021年3月にかけて調査を実施した。

② 調査対象学級

福岡県・長崎県の小学校17校を対象として調査を行った。調査対象学級は、まず、調査協力依頼時に、各学校の校長及び各担任教師の推薦を受け選定した。次に、第1学年から6学年までのバランスを考慮し、調査対象学級を決定した。最終的に46学級の教室掲示を調査対象とし、調査対象学級の学年・児童数・担任教員の教職歴を尋ねた。

調査対象学級の学年は、第1学年7学級、第2学年8学級、第3学年7学級、第4学年8学級、第5学年9学級、第6学年7学級であった。各学級の在籍児童数は、10名以下が2学級、11～20名が8学級、21名以上が36学級であった。担当教師の教職歴は、6年～28年（10年以下9名、11～20年以下が16名、21～30年以下が15名、31年以上が6名）であった。

③ 調査方法

46学級の全てにおいて、教室掲示を映像として記録（以下は、「映像記録」とする）した。掲示内容に関して不明な点については、映像記録と共に、担任教師に掲示の内容に関する説明を求め、その内容を記録（以下は「説明記録」とする）した。また、今回の調査では記録することができなかった時期の教室掲示の映像記録の提出を求めた。映像記録がない場合は、その掲示の説明を求め記録した。

④ 分析方法

教室掲示の映像記録と説明記録をもとに、以下の手順で分類・整理した。

まず、教室掲示の1472枚の映像記録と説明記録をもとに、学級経営と関連のある掲示を抽出しラベル付けを行った。その際、掲示の装飾方法、色彩、掲示場所、サイズは除外し、掲示が意図している内容をもとにラベル付けを行った。この段階で、学校外部機関の行事等の連絡を記したポスター類は分析対象外とした。最終的に18のラベルに整理した。

次に、ラベル付けした掲示物の出現率を算出した。出現率の算出方法は、以下の通りである。まず、1枚の映像記録に複数のラベルが混在した場合は、それぞれのラベルとしてカウントした。次に、ラベルの出現回数は、1学級・1ラベル・1カウントまでとした。これは、各学級、複数回出現するラベルと一回のみ出現するラベルがあり、出現回数に大きな偏りが見られたためである。ここでカウントした回数をもとに、各ラベルの出現率を算出した。学年（第1学年～6学年）ごとのラベルの出現率については、学年ごとの出現率に差が見られなかったため、全学年を通した出現率をもとに分析することとした。また、教職歴とラベル出現率との関連性も同様であった。

最後に、ラベルの内容や出現率をもとに、ラベルのカテゴリー化を図った。また、各カテゴリー間の関連性を踏まえ、教室掲示を分類整理し図にまとめた。

(3) 研究1の結果とまとめ

① ラベルの作成と分析

教室掲示の映像記録と説明記録をもとに、学級掲示のラベルを作成した。以下に、その結果を述べる。

分析を通して抽出された18ラベルそれぞれのカウント数及び出現率は、表1の通りである。各ラ

ベルの主な内容について、出現率の高いラベルから順に述べる。

表1 掲示のラベルと出現率

番	ラベル	カウント数	出現率 (%)
1	学級目標	46	100.0
2	当番活動表	46	100.0
3	係活動表	46	100.0
4	給食献立表	46	100.0
5	日直の仕事	44	95.7
6	時間割・一日の予定	42	91.3
7	めあてカード類	41	89.1
8	学級独自の時期的目標 (日・週・月・行事等)	40	87.0
9	子どもの作品及びコメント	39	84.8
10	朝・帰りの会の進行表	38	82.6
11	学習時の約束事	36	78.3
12	学習内容	30	65.2
13	子どもの向上点	25	54.3
14	学級の歩み	23	50.0
15	学校・学年全体の共通目標	20	43.5
16	学級通信・学年通信	19	41.3
17	学級独自の取組	17	37.0
18	その他	11	23.9

「1学級目標」の出現率は100%であった。表記方法としては、学級の目指す姿を端的に表した合言葉的な表記（例えば、「輝き」や「向日葵」等）、文章表記（例えば、「～をしよう」等）の2種類が見られた。表記内容の共通性は見られず、独自性が高かった。「2当番活動表」の出現率は100%であった。給食当番表・清掃活動表があり、それぞれ子どもの名前と役割分担等を示す部分は共通していた。グループを編成してグループごとに役割分担している学級も見られたが、基本的に示されている内容は共通する部分が多かった。「3係活動表」の出現率は100%であった。係活動の内容や係の構成員、役割分担等が示されていた。係の内容・形態・人数は学級ごとに様々であり独自性が高く、グループで一つの係をしているものと、一人一役として活動しているものが見られた。「4給食献立表」の出現率は100%であった。各学校全体で統一されたものが掲示されていた。また、2の給食当番表と共に掲示している学級が多かった。「5日直の仕事」の出現率は95.7%であった。仕事内容を壁面掲示としている学級と、手持ち用のファイル形式にしている学級があった。今回は、この手持ち用のファイル形式も掲示の一つとしてカウントした。「6時間割・一日の予定」の出現率は91.3%であった。週の時間割を掲示している学級、一日の予定を掲示している学級、週と一日の両方を掲示している学級があった。また、ホワイトボードを活用し、一日の動きの詳細を掲示している学級も見られた。「7めあてカード類」の出現率は89.1%であった。毎月・毎学期の子ども一人一人のめあてが掲示されていた。また、行事等に向かう個人のめあて等が掲示されていた。内容は、主に、学習に関すること、生活全般に関すること等が記されていた。「8学級独自の時期的目標 (日・週・月・行事等)」の出現率は87.0%であった。学級目標以外の時期的な目標が示されていた。毎日のめあて、週や月の重点的な取組等、学級の実態に応じた内容が掲げられていた。「9子どもの作品及びコメント」の出現率は84.8%であった。主に絵画・版画・習字等の作

品や、授業の成果物であった。教師のコメントは、主に、作品への取り組み方や作品の価値づけ等が記されていた。「10朝・帰りの会の進行表」の出現率は82.6%であった。基本的な進行内容の他に、各学級独自の取組（例：今日の○○等）が位置付けられていた。「11学習時の約束」の出現率は78.3%であった。主に発表の仕方や話の聞き方等に関するものが多く見られた。学校全体で統一された掲示と、各学級独自の取組を示している掲示があった。「12学習内容」の出現率は65.2%であった。学習内容の要点やまとめ、授業で用いた教材等が掲示されていた。また、各学級で重点的に取組んでいる教科の教材が掲示されていた。「13子どもの向上点」の出現率は54.3%であった。子ども一人一人のよさや学級全体として向上した点を掲示していた。一人一人の名前と具体的行動等を記し、その行動がもつよさを価値付けし、短冊状の画用紙に記載しているものもあった。「14学級の歩み」の出現率は50.0%であった。行事や学級での取組等に関する写真を掲示し、その際の出来事等を記していた。学級の成長の様子や感動の場面等をピックアップした掲示が多く見られた。「15学校・学年全体の共通目標」の出現率は43.5%であった。学校目標・学年目標、学校全体で取り組んでいる生活目標・給食目標・清掃目標等が見られた。「16学級通信・学年通信」の出現率は41.3%であった。内容の一部に週の行事予定や月の行事等が記されていた。「17学級独自の取組」の出現率は37.0%であった。各学級で取り組んでいる活動（目標達成に向けた取組に関するもの）や言葉遣いに関する取組についての掲示が見られた。また、学級の合言葉的な掲示も見られた。「18その他」の出現率は23.9%であった。学級で歌っている歌詞や、季節の詩、国語・道徳の授業と関連した詩などが見られた。他には、運動会やスポーツ大会等の賞状、ゲストの先生方や地域の方からの手紙等が見られた。

② 学級掲示のカテゴリー化と概念図

表1に示した18ラベルの内容を踏まえ、共通性が見られるものをカテゴリー化した。次に、各カテゴリー内で、類似性が見られたものを要因として分類整理した。結果は、以下の通りである。

まず、18ラベルを基礎的掲示と発展的掲示の2つのカテゴリーに整理した。「カテゴリー1基礎的掲示」は、主に、学級の基盤をつくる際に活用している掲示とし、「A学級の指針」「B生活基盤」「C学習基盤」の3つの要因に分類整理した。「カテゴリー2発展的掲示」は、学級独自の取組を行う際に活用している掲示とし、「D学級風土」「E所属意識」の2つの要因に分類整理した。

まず、カテゴリー1の各要因の位置付けについて述べる。「A学級の指針」として、「1学級目標」「8学級独自の時期的目標（日・週・月・行事等）」の2ラベルを位置付けた。この要因は、学級集団の方向性を示すための掲示となる。学級全体で共通する目標として、まず学級目標があり、次に、学級の状態や時期等を踏まえて時期的な目標が設定されていた。「B生活基盤」として、「2当番活動表」「3係活動表」「4給食献立表」「5日直の仕事」「6時間割・一日の予定」「10朝・帰りの会の進行表」「15学校・学年全体の共通目標」「16学級通信・学年通信」「18その他」の9ラベルを位置付けた。この要因は、学級における生活の基盤づくりに関連したものであり、学級を組織的に運営したり、効率よく集団を動かしたりするための掲示となる。給食・清掃活動に関する活動順序や日直・係活動に関する具体的な役割・内容等が示されていた。学級通信や学年通信には、週や月の予定が記されていた。「C学習基盤」として、「11学習時の約束」「12学習内容」の2ラベルを位置付

けた。この要因は、授業内で活用する掲示となる。主に、授業中の発表の仕方や話の聞き方に関する掲示が見られた。学校・学年で統一されたものと、学級独自で作成した掲示があった。学習内容については、時期的なものが多く見られた。

次に、カテゴリ-2の各要因の位置付けについて述べる。「D 学級風土」として、「13子どもの向上点」「14学級の歩み」「17学級独自の取組」の3ラベルを位置付けた。この要因は、学級の集団づくりの方向性を示しているものと、個の存在感や個の行動のよさを共有する掲示となる。「E 所属意識」として、「7個人のめあてカード類」「9子どもの作品及びコメント」の2ラベルを位置付けた。この要因は、個の学級への所属意識を高める掲示となる。子ども一人一人の写真、目標、作品等があり、それぞれの掲示に学級担任のコメントが記されている掲示が多く見られた。

各カテゴリ・要因・ラベルの関連性を踏まえ、分類整理した結果を図2に示す。

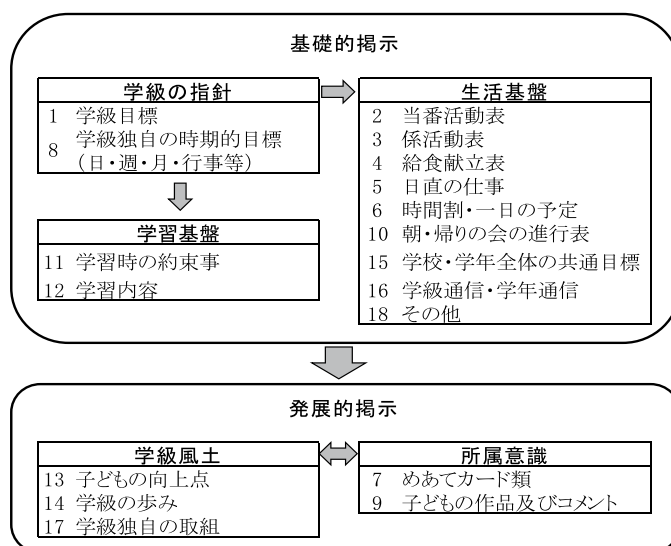


図2 学級掲示のカテゴリ・要因・ラベル

4 研究2「教室掲示の活用法・役割に関する調査」

(1) 目的

研究1の分析結果(図2)をもとに半構造化面接を行い、各学級における教室掲示の具体的な活用法や役割等を明らかにすることを目的とする。

(2) 手続き

① 調査時期

2021年7月から8月にかけて、半構造化面接を実施した。

② 調査対象者

調査対象者は、研究1で対象とした46学級の中から、表1の18ラベル全ての掲示を行っている者を対象とし、6名の教員を抽出した。調査対象者の属性を表2に示す。

表2 調査対象者の属性

教員	性別	教職歴 (年)
A	男	19
B	男	18
C	男	20
D	男	9
E	男	18
F	女	14

③ 調査方法及び内容

半構造化面接を実施するに当たり、調査対象者に対し著者より倫理的配慮についての説明を行い、ボイスレコーダーを用いて発話を録音することを伝えた。半構造化面接の進行役は著者が行い、以下の手順で行った。

1. 研究の目的を伝え、研究1で明らかになった表1の18ラベルの掲示内容と、図2の教室掲示を分類整理した図についての説明を行った。2. 半構造化面接の進め方として、研究1で抽出された5要因の順番で質問をすることを伝え、その中で、各要因・各ラベルの活用法や役割について質問することを伝えた。3. 質問後、その内容に関連して、自由に回答するように求めた。また、調査対象者の回答を受けて、著者から関連する質問をすることを伝えた。

所要時間は、一人当たり25～40分程度であった。

表3 「A学級の指針」に関する回答

カテゴリー	回答コード	ラベル番号	回答者属性
大 下位			
時期	学級目標は、年度初めに掲示する。また、年間を通して掲示している。	1	A B C D E F
時期	時期的な目標は、何らかの行事や重点的に取り組む活動等がある場合に掲示する（例：運動会や〇〇大会等）。	8	A B C D E F
場面	学級目標が学級での生活を送る上での合言葉のようなものになっているので、使用頻度は非常に高い。	1	A B C D E F
場面	毎学期の振り返りを通して、学級をもっとよりよくなるための目標を設定し掲示するようにしている。	8	A C F
場面	週・月目標は、学級や子どもの実態を受けて重点的な取組を決め、そのタイミングで掲示する。	8	B E
活用法	場面の状況に応じて、学級目標を指さして目指す姿を意識できるようにし、適宜用いている。	1	B C
場面	帰りの会や学級活動において、目標の振り返りを行う場面等を設定する。	1.8	C D E
場面・工夫	学級目標を受けて、学級として目指している姿に近づくための具体的な目標（日・週・月）を設定し掲示している。	8	B D
工夫	子どもと共に1年間のゴールの姿をイメージし、学級目標として掲示し学級のシンボリックな掲示とする。	1	B D
工夫	学級目標は抽象的な言葉が多いので、それを具体化した姿等を掲示するようにしている。	8	C D E
工夫	担任の思いも子どもに伝え、その思いも学級目標に入れ込む。	1	A C
工夫	学級目標は結果目標となっている部分があるので、その結果に近づくための行動目標を掲げて掲示する。	8	A D F

役割	学級への所属感を持たせるためにも、学級目標の掲示は必要不可欠である。	1	A B C D E F
	目指している学級像をイメージさせるために、目標類の掲示は欠かすことができない。	1.8	A B C D E F
	掲示として目標を可視化することで、学級の方向性に関する意識付けを行うことができる。	1.8	D E
	学級経営の柱となることを言葉として掲示することで、子どもも担任自身も意識しやすくなる。	1.8	A C E

(3) 結果

各要因・各ラベルに関する半構造化面接を行った結果を5つの要因（「A 学級の指針」「B 生活基盤」「C 学習基盤」「D 学級風土」「E 所属意識」）ごとに示す。また、半構造化面接の中で、ラベルや要因を限定せずに、教室掲示全体に関する意見が出されたため、掲示全体の項目を設け、合計6項目の結果をまとめた。結果を表3～8に示す。

表4 「B 生活基盤」に関する回答

カテゴリー 大 下位	回答コード	ラベル番号	回答者属性
活用 法	時期 当番活動（給食や清掃）関係の掲示は、毎年、年度初めに必ず掲示する。	2.5	A D E F
	時期 係活動の掲示は、基本的に学期ごとに掲示し、学級の状況に応じて変更する。	2.3.4.16	A C F
	場面 毎朝、ホワイトボードを用い、一日の動きの詳細を掲示するようにしている。	6	F
	場面 子どもが見て、すぐに自分の役割が分かるような掲示（ネームプレートの活用等）に努めている。	2	B C F
	場面・工夫 一日の動きは、毎日活用するものなので、子どもが見やすい場所に掲示する。	2.4.5.6.10	C E
	場面・工夫 当番活動は、毎週、毎月の変更となるため、子どもたち自身で変更できる場所に掲示している。	2	C F
	場面・工夫 低学年の場合、一日の動きや週報の掲示をすることで、次の時間の準備を自分たちで行うことができるようになってくる。	16	C
	工夫 係活動の内容を踏まえながら日直の仕事を決め、それを掲示する。	5.10	F
	工夫 時間割を記載している週報や学年通信を掲示し、週の予定が分かるようにしている。	3.6	A C D
	工夫 日程等の掲示は、子どもの役割として位置付けることで、学級の組織づくりに繋げている。	6	C E
役割	工夫 係活動の掲示は、子どもの写真と共に掲示するようにしている。	3	D F
	係活動の掲示があると、子ども同士で声を掛け合って、主体的に動くことができるようになる。	3	A B D
	当番活動等の掲示は、自分の役割を自覚させるために、また、責任感を高めていくために必要である。	2.3	A B
	当番活動等の掲示は、子どもの自主性を培うためにも欠かすことができないものである。	2.3.4.5.10	C E
	当番活動等の掲示があることで、教師の指示が減るだけでなく、効果的に時間を活用することができる。	2.3	A E
	学級が一つの組織として動いていくためにも、当番活動等の掲示は必要である。	2.3.4.5.10	A C E F

表5 「C 学習基盤」に関する回答

カテゴリー 大 下位	回答コード	ラベル番号	回答者属性
活用 法	時期 学校全体で統一した掲示の場合（例：話型等）は、年度初めから掲示されている場合が多い。	11	E F
	時期 発表時の話型・声の物差し（場面に応じた声の大きさを表すもの）・学習過程の掲示は、年間を通して掲示している。	11	C F
	時期 各教科等における学習の基本的な学習過程を記した掲示は、年度・学期始めに多く用いる。	11	A B
	場面 学習内容の掲示は、前時の学習とのつながりを意識させたいときに、計画的に用いる。	12	A B F
	場面 声の物差しの掲示は、低学年を担当した時は用いることが多いが、学年が上がるにつれて使用頻度は低くなる。	11	C E

場面	学校全体で統一した掲示は、学級の実態に依拠していないときも多くあり形骸化してしまうことがある。	11	A	F
場面	発表時の約束事等は、子どもが授業中に活用している。活用場面は、子どもの実態によって様々である。	11	A B C	
場面	発達段階や子どもの実態によるが、発表の仕方を記した掲示は、低学年を担当しているときは多く用いていた。	11	C	E
場面	学校で取り組んでいる学習中の約束事は、教師がその取組を確認するための掲示でもある。	11	A	
活用 法	場面・工夫 学習に関する掲示は、その時々で重点的に取り組んでいるものを掲示する。	12	B	E
場面・工夫	発表の仕方や聞き方を指導するとき、掲示を有効に活用することができる。	11	C	E
場面・工夫	発言に詰まってしまった子どもがいた場合は、掲示を指さしながら支援することができる。	11	C	
場面・工夫	国語の「話す・聞く」単元を行っている時期に、話し方や聞き方に関する掲示を行う。	11		F
工夫	発表の仕方等の約束事は、子どもの実態に依拠して増やしたり変更したりして掲示している。	11	A B C	
工夫	国語の学習等で学んだことをもとにした学習基盤づくりの掲示を行う。	11.12	C	F
工夫	発表の仕方や聞き方など、子どものよさを発見した時は、それを掲示して学級で共有することができるように心がけている。	11	A B C D	
役割	学習を効率よく進めるためのサポート的役割として、学習に関連する掲示が重要になる。	11.12	B	D E F
	学習に関連する指導内容を掲示しておくことで、同じ基準で指導を行うことができる。	11.12	A	C D F
	新たな発言の良さ等を掲示しながら学習基盤をつくっていくことで、発言しやすい雰囲気ができる。	11	A	C E F
	掲示を用いながら学習基盤をつくっていくことで、何度も同じことを伝えなくてよい。	11.12	A B	
	基本的な学習に向かう姿勢等の掲示を用い学校全体で同様の指導を行うことで、効率よく年度初めの指導を行うことができる。	11	C	E
	「まず…、次は、…」といった発言の仕方を掲示しておき、それを積み重ねることで、発言の仕方を身に付けることができる。	11		D

表6 「D学級風土」に関する回答

カテゴリー	回答コード	ラベル番号	回答者属性
大 下位			
時期	子どもや学級のよさは、毎日、短冊に掲示するようにしている。	13	D F
場面	何らかの問題が発生した時に、よかった時の学級の状態を振り返るために掲示を用いる。	14	A D E
場面・工夫	学級での取組（長縄跳びの記録表）について、日々の結果をグラフにして掲示している。	17	D E
場面・工夫	学級独自の取組等を時間順に掲示するようにしている。	14.17	A C F
場面・工夫	月・学期ごとに、学級の歩みを写真等を用い掲示するようにしている。	14.17	B C D F
活用 法	場面・工夫 月目標と関連して重点的な取組を決め、その取組の様子を写真等を用いて掲示するようにしている。	14.17	B F
場面・工夫	年間の掲示計画（月の終わりに〇〇のような掲示をする等）を立てておき、ある程度統一感のある掲示を作成するようにしている。	17	A C F
場面・工夫	学級での取組の結果を掲示し振り返ることで、自分たちで明確に目標を持つことができるように工夫している。	17	A D
工夫	毎日の子どもの頑張りを目に見える形で掲示し、よりよい学級風土づくりに繋げている。	13	B C F
工夫	日常的なことでも、写真を用いてその様子を掲示するようにしている。	14	B F
工夫	動く掲示（学級のよさを集めて花を咲かせる掲示等）を心がけている。	17	C D E
工夫	行動の持つ価値やよさを掲示し、言葉として残すことができるように心がけている。	13.14.17	D
工夫	子どもの成長や向上した部分を意識的に言葉として掲示するようにしている。	13.14	B C E

活用法	工夫	子どものアルバムづくりのような感覚で写真を掲示する。子どもへの愛情を表す一 方策でもある。	13.14		D	F
	工夫	掲示物を見たり、読んだりすること自体が楽しくなる教室環境をつくりたい。	17	A B		F
役割		一人一人のよさを伝える掲示等は、学級風土づくりのサポートの役割として活用し ている。	13	A B C		
		子どもの姿や約束事等を言葉として掲示することで、学級独自の風土をつくってい くことができる。	13.14		D E	
		担任の思いを言葉として掲示に残すことができる（学期初めの言葉など）。	17	A B	D E	
		学級の歴史を順次掲示していくことで、自分たちの暮らしを振り返ることができる。	14	A		F
		学級における活動の軌跡を掲示することで、よりよくフィードバックすることがで きる。	14	A	D	
		「目標に近づいているんだ。自分たちは成長しているんだ。」ということを実感させ るために掲示を用いる。	1.8		B C D	
		掲示を工夫しながらよりよい教室環境をつくることで、学級への所属感が出てくる。	13	A		F
		子どものよさを掲示することは、一人一人の存在感を高めたり居場所づくりにも繋 がると考える。	13	B	E F	
		学級や個人のよさを文字として掲示することで、そのよさを全体に広げたり共有し たりすることができる。	13		D	
		学びや暮らしの足跡を掲示することで、自分で自分の高まりを気づくことができる。	14	B	D	
		振り返りの掲示は、学級の物語となる。自分たちの頑張りを振り返る際に用いるこ とができる。	14	A		
	暮らしにおける合言葉等をつくり掲示し意識付けすることで、けじめのある学級風 土づくりに繋げている。	13.14		C	F	
	学級としての喜びを掲示として残すことで、学級の一員としての喜びを実感でき ると考える。	14.17	A		E	
	子どもと担任で、学級ならではの言葉を掲示し共有することで、自分の学級への所 属感が高まる。	17		C D		

表7 「E 所属意識」に関する回答

カテゴリー 大 下位	回答コード	ラベル番号	回答者属性	
場面	全員の作品（例：絵画の作品等）が完成した段階で、掲示するようにしている。	9	C F	
場面・工夫	毎月・毎学期のはじめと終わりに、各自で目標を立て、一人一人のめあてカードを 記入し掲示するようにしている。	7	A B C E F	
活用法	工夫	子どもの作品には、肯定的なコメントを入れるようにしている。	9	A B C E
	工夫	子どもの作品へのコメントは、結果だけでなくその過程も評価し、コメントを入れ 掲示している。	9	B E
工夫	個々人の掲示を通して、会話のきっかけをつくることができる。例えば、給食時の 子どもとの会話等。	7.9	D E	
役割	一人一人の写真やめあてを掲示することで、子どもが見る機会が増え、自分の居場 所づくりにつながる可能性がある。	7	A F	
	毎月の個人カードを掲示し、いつも見ることができる環境にしておくことで、学級 への所属感も高まると思う。	7.9	F	
	自分の教室であるという感覚が大切で、そのために教室掲示を行う。	7.9	A C F	
	学級写真等を効果的に活用し掲示することで、学級への所属感を高めていくことが できるのではないだろうか。	7	B F	
	掲示を活用しながら達成したことを月ごとや学期ごとに振り返る活動を行い、自分 たちの成長に気づかせる。	9	C D	
	掲示を通して、友達のよさを共有することができる。また、それを広めていくこと もできる。	9	A E	
個々人の掲示があると、保護者会のと きなどに、その掲示をきっかけに会話をする ことができる。また、保護者にも安心感を与えることができる。	7.9	A		

取組に対する意識化を図りながら、継続した指導を行っていくことができるのである。また、これは、指導内容の定着を図るだけでなく、学級経営の方針を共有することに繋がっていると推測される。

二つ目は、教師自身も掲示を活用することで、一貫した指導や効率的な指導を行うことができるということである。「掲示を用いながら、子どもの指導を行うことで、子どもの指導基準を明確にすることができる。」「学習に関連する指導内容を掲示しておくことで、同じ基準で指導を行うことができる。」等からも分かるように、同じ基準で子どもと接し指導を行っていくことができ、子どもを迷わせない一貫した指導が可能になる。さらに、「掲示を用いながら学習基盤をつくっていくことで、何度も同じことを伝えなくてよい。」「基本的な学習に向かう姿勢等の掲示を用い学校全体で同様の指導を行うことで、効率よく年度初めの指導を行うことができる。」「学級経営を効率的に進めるサポート的役割として掲示が重要になる。」等からも分かるように、指導の効率化を図ることもできる。掲示物作成は、時間も労力もかかる仕事の一つである。しかし、結果的に、掲示を効果的に活用することで、一貫した指導や効率的な指導に繋がると考えられる。

三つ目は、掲示には、学級組織の基盤をつくる役割があるということである。研究1の結果より、「B生活基盤」「C学習基盤」の二つの要因が抽出されたことから、そのことが分かる。また、「当番活動（給食や清掃）関係の掲示は、毎年、年度初めに必ず掲示する。」「学校全体で統一した掲示の場合（例：話型等）は、年度初めから掲示されている場合が多い。」等の回答からも分かるように、年度当初に、掲示を活用しながら学級組織をつくっていることが分かる。基本的な学級組織ができた段階で、それをベースに学級経営を展開していると考えられる。例えば、「日程等の掲示は、子どもの役割として位置付けることで、学級の組織づくりに繋がっている。」「当番活動等の掲示は、子どもの自主性を培うためにも欠かすことができないものである。」等の活用法である。このように、基本的な学級組織をつくった上で、子ども自身が見通しをもって自主的に活動することに繋がったり、当番活動や係活動等が活性化されるような取組を進めたりしていると考えられる。以上のような取組を通して、よりよい学級集団をつくっているということが推測される。また、これは、集団の一員としての自覚を高めることにも繋がると考えられる。

四つ目は、子ども一人一人の居場所づくりに繋がる掲示や学級の集団のまとまりをつくっていくための掲示を行いながら、よりよい学級経営に繋がっているということである。個人のめあてカード等を活用し、一人一人の存在を意識することができる掲示をすることで、教室空間が子どもにとっての居場所となっていると考えられる。また、1年間の学級の経過や、行事等に取り組んだ経過等を掲示し、自分たちの学級の歩みを歴史や物語風にして活動を振り返ることができるようにして、集団としての高まりやまとまりに気づくことができるように工夫している取組もみられた。これらの掲示は、発展的掲示に位置付けられる。発展的掲示の割合は、基礎的掲示と比較すると少ない。これは、学級経営のビジョンとの関連性があると考えられる。どのような学級経営をどのような具体策で推進していくのかという一連の流れを踏まえた上で、発展的掲示が行われていると考えられる。年間を見通した学級経営の方針をもとに、子どもの実態に応じながら掲示を活用していると考えられる。

以上のように、掲示の利点や特徴を活かして、学級の基盤となる取組を推進したり、集団として

の方向付けを行ったり、子どもの居場所となる教室空間をつくったりする等、掲示には学級経営をよりよく推進していく際のサポート的な役割があるといえる。また、より効果的な教室掲示としていくためには、教師の計画的な掲示の運用が必要であると考えられる。

6 課題

今回の研究1においては、教室掲示に関して、校長等の推薦を受けた教員を対象として行った。教職歴や学級の子どもの人数等を検討した上で対象者を決定していない。研究2においても同様に、研究1を受けて、18ラベル全てを活用していた教員のみを対象とした。そのため、今回の調査結果は、教室掲示を効果的に活用していると考えられる教員を対象とした研究となっている。今後は、小学校教員全体の掲示の取組についても、検討していく必要がある。また、掲示の活用法や役割は明らかにすることができたが、その結果、どのような学級になったのかといった関連性については明らかにすることができていない。今後も継続した研究が必要である。

引用文献

- 1) 鳥海不二夫 石井健一郎 (2007) 「学級集団形成における教師による介入の効果」『電子情報通信学会誌』 Vol.J90 - D NO.9 pp2456-2464
- 2) 文部科学省 (2014) 「教職生活に全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (審議の最終まとめ)」中央教育審議会第82回総会資料 p3

参考文献

- 石原努 (2018) 「学級経営案 (小学校版) の内容分析及び考察」『筑紫女学園大学研究紀要』第13号 pp151-163
- 石原努 (2020) 「小学校教師の学級経営力の構造 — 学級経営の具体的方策に関する調査研究を通して —」『筑紫女学園大学研究紀要』第15号 pp131-143
- 文部科学省 (2020) 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」第128回初中分科会資料1
- 大崎淳史 吉村彰 (2013) 「小学校の校舎タイプによる掲示空間利用の比較 — 小中学校における情報伝達手段としての掲示空間の計画に関する研究 その1 —」『日本建築学会計画系論文集』第78論第684号 pp335-344
- 佐竹勝利 (2002) 「小学校の学級経営に活かす教室掲示 — 児童の変容と教師の指導に着目して —」『鳴門教育大学学校教育専攻修士論文集』 pp24-25
- 高橋陸斗 (2019) 「教師が理想とする学級雰囲気に基づく学級内掲示物の分類」『日本教育心理学会第61回総会発表論文集』 p634
- 山岸明浩 奥原由真 (2016) 「小学校の普通教室における掲示物の実態と児童の意識に関する事例研究」『人間と生活環境』第23号第2巻 pp49-57

(いしはら つとむ：人間科学科 教授)

